

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00174

研究課題名(和文)『集神州三宝感通録』聖寺・瑞経録の美術史料論的研究

研究課題名(英文) Study on the " Shengxilu" and "Ruijinglu" in the "Jishenzhuosanbaogantonglu"

研究代表者

肥田 路美 (HIDA, ROMI)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：00318718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、初唐時代の律匠・仏教史家である南山大師道宣の晩年の著作『集神州三宝感通録』のうち、巻下の「聖寺録」と「瑞経録」について、『大正新脩大藏経』所収本を底本として訓み下し・現代語訳と詳細な注釈をおこない、そこから抽出した問題や関連する事象について論攷することを目指した。この成果は研究期間中に随時、冊子体の成果報告書として刊行し、国内外の大学や図書館など当該研究分野の関係機関や研究者に配布し、所見や修正意見などを広く求めた。成果報告書は合計3冊、すなわち『美術史料として読む『集神州三宝感通録』 釈読と研究(十二)』全197頁、『同(十三)』全124頁、『同(十四)』全125頁である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

道宣の本著作は、仏教学、仏教史、仏教美術史、説話文学、歴史学などにとって非常に有用な資料であるが、これまで全文を通しての詳細な読解や注釈はほとんどなされてこなかった。本研究課題では、天台山、五臺山、蓬萊山など実在・架空を問わず12箇寺の靈験を集成した「聖寺録」を通して、羅漢信仰、炳靈寺石窟や響堂山石窟について掘り下げて論じた。また仏教經典に関する全38話の感通譚は、南北朝～初唐における經典の読誦・書写・講説等における靈験であり、その詳細な読解により写経や講経において清浄性や如法な実践が重視された実態などの問題を具体的に明らかにすることができた。成果報告書は全3冊、計446頁に及ぶ。

研究成果の概要(英文)：In this research I focused on the " Shengxilu (聖寺録)" and "Ruijinglu (瑞経録)" in the latter part of the book "Jishenzhuosanbaogantonglu (集神州三宝感通録)" written by Taosheng (道宣), in the Early Tang Dynasty. Based on the book included in the "Taisho Shinshu Daizokyo", I translated it into modern language and made detailed annotations, aiming to discuss the problems and related phenomena extracted from it. The results were published as a booklet report at any time during the research period, distributed to researchers and institutions related to the research field, such as universities and libraries in Japan and overseas, and asked for their observations and corrections. A total of three publications were produced: "Jishenzhuosanbaogantonglu Reading as an Art Historical Material: Interpretation and Research (12)", 197 pages; "ditto (13)", 124 pages; " ditto(14)", 125 pages.

研究分野：仏教美術史

キーワード：道宣 中国仏教 靈験説話 仏教美術

1. 研究開始当初の背景

初唐時代の高僧道宣(596~667)の晩年の著作である『集神州三宝感通録』(以下『三宝感通録』)三巻は、東アジアの仏教史、なかでも信仰の実態や、造寺造仏活動など仏教美術に関係する事象を研究する上で不可欠な文献であるが、従来大方の研究者が道世の『法苑珠林』所収の同話を参照引用し、本書が通読されることは殆どない。しかしながら、『法苑珠林』所収話との関係を吟味すれば道宣の本書の方が先行することは明らかであり、南山律宗の開祖にして仏教史家であった道宣が中国の仏教をどう捉えていたかを探り、本書の史料的な位置づけを明らかにできれば、本文献は仏教美術の諸問題に迫る具体事例とアイデアの宝庫となるはずであると考えた。

そこで研究代表者は、平成20年春から『三宝感通録』巻上「舍利表塔縁」の詳細な訳注と、叙述背景に踏み込んだ研究を開始した。翌平成21年からは、幸いに科研基盤Cによる研究助成を恵与されたため、大学院生や関係する日本・中国の研究者を研究協力者とする事で研究体制を整えることが可能となった。そして、巻上に引き続いて巻中「靈像垂降篇」に取り組み、以来、現在まで15年間にわたって研究を継続的に推進し、毎年の成果を『美術史料として読む『集神州三宝感通録』 釈読と研究』と題した冊子体で公開してきた。本次の研究は、その継続課題として実施したものである。

2. 研究の目的

本研究の目的と学術的な特色は以下の4点である。

- ・『三宝感通録』巻下の「聖寺録」「瑞経録」について学术界で初めての現代語訳と詳細な注解をおこなう。本書の巻下は巻上・巻中に比して従来ほとんど参照されてきておらず、これを美術史の観点から分析し、史料性について再評価することで、今後の活用の基盤とする。
- ・中心的題材である具体的な寺院や仏経と、それに付随して述べられる仏像、堂塔、荘嚴具等の造形物や、造寺、造仏、写経、齋会など実践活動の実態に関わる事柄を細かく拾い上げて、でき得る限り多角的な注解を試みる。
- ・これらの記事を採録、撰述した道宣の意図を常に問うこと。それによって、唐が南北朝時代をどのように評価し継承したか、仏国インドをどう理解し表象しようとしたか、中国の仏教/仏教美術をどのように構築しようとしたか、それが世俗社会とどのように関わったか、などの問題に具体的に迫ることができる。
- ・毎年度末に、一年間の研究成果である「訳文」「注解」と、関係する問題を掘り下げて論じた「研究」からなる成果報告書を、逐次公刊していく。それによって、随時各方面からの教示や意見を仰ぎ、また参照・引用に供する。そうして得た新たな知見を更に研究に反映させること。

3. 研究の方法

『大正新脩大藏經』巻52所収本を底本とし、『大唐内典録』巻十歴代衆経感応興教録や『続高僧伝』等の道宣の著作をはじめ、『法苑珠林』『冥報記』等所収の同話、類話を参考にして字句を校勘し、訓み下し文、現代語訳、注解をおこなう。注解は、原則的に初出の固有名詞や仏教語などの術語に加えて、叙述内容に関する事柄を対象とし、固有名詞についても通例の辞書的説明では終わらず、美術史・仏教史・文化史の立場からでき得る限りの拡大的解説を行なう方針をとった。その結果、一つの注項目につき2000字程度、長ければ10000字を超える文字数となった。

これらの原稿は約15名からなる研究協力者らと共に何度も読み合わせて吟味し、改稿を重ね、編集作業を経て毎年度末に冊子として刊行した。なお、研究協力者には仏教美術史以外に、仏教

思想史や説話文学を専門とする研究者や大学院生たちにも加わってもらい、多角的な問題意識や知見の提供を得て議論や検討を深めることができた。

4. 研究成果

研究成果は、合計3冊の報告書、すなわち『美術史料として読む『集神州三宝感通録』 釈読と研究(十二)』全197頁、『同(十三)』全124頁、『同(十四)』全125頁にまとめ、国内外の大学や研究所・博物館など約60機関と、同じく国内外の仏教美術史・仏教考古学・仏教学・説話文学・思想史・日本史・中国史・文化交流史・建築史などの研究者約160名に頒布して公開した。その都度、訓み下し文や訳文についての指摘が寄せられ、それをもとに再検討することで修正を加えたり理解を深化させることができた。また論文等において引用参照されるケースもまあり、手応えを得ている。

「聖寺録」は序文以下、天台山石梁寺、東海蓬莱山聖寺、唐述谷仙寺、相州石鼓山竹林聖寺、林慮山靈隱聖寺、晋陽冥寂山聖寺、五臺山太孚聖寺、西域黒蜂山石窟聖寺、太一山九空仙寺、終南山竹林寺、子午関南独聖寺、終南山折谷炬明聖寺など、實在・架空を問わずインドから東海の蓬莱山まで12箇寺の靈験を集成したもので、聖寺・聖僧の概念とイメージ、仏法相伝(付法蔵伝)とその表象、羅漢信仰と羅漢像・羅漢図、實在の西インドの石窟(黒蜂山石窟聖寺条)や炳靈寺石窟(唐述谷仙寺条)・響堂山石窟(石鼓山竹林聖寺条)との関係、相州地域の仏教動向と造像活動などが大きなトピックとなった。

「聖寺録」の付注箇所は総計204項目を数える。主なものを挙げると、降靈、四依・三品・人依、三洲、寶頭、六万歳、香氣鐘声、筌、臨海、東海、抱罕、西域、梁州道、聖寺・仙寺、天台山、石梁聖寺、帛道猷、竺姓の者、統涉、石梁、虹梁、磬声、経唄、唱薩、禅觀、神僧による予言、端坐して入定、王羲之と天台山、朱齡石、遼東への使者、風に随い海に泛ぶ、東海蓬莱山、聖居、杯度道人、鉢袋、竹杖、眼を閉じて往くにまかせよ、揚都の大桁、桁欄に騎して馬と口ずさむ、蓬莱道人、鉢を擲つ、唐述谷寺、風林津、長夷嶺、積石山、禹貢の導く極地、丹青飾岫、山を鑿って室を構える、一天寺、羌、醴泉、鄴下の寺、夏坐、飲酒、鼓山、竹林寺、虚懐に副う、夕べに死すとも恨み無し、石窟寺、官寺、櫃、金鋪、眉長く鼻高い風貌、僧房、案、沙門嵩公、嵩山、高棲士、林慮、白鹿山、禺中、三門、門額、靈隱之寺、牛のような犬、梵僧、講堂、床榻、高座、齋時、彼岸寺、鑒禅師、豎義、衣を整える、柞木、上統法師、石趙、仏図澄、文宣帝、北齊の晋陽、白い駱駝、経函、奄然として睡るが如し、冥寂山、木井寺、捨身の癡人、劉桃枝、五臺山、清涼府、文殊と五百仙人、清涼雪山、小石浮図、魏文帝、石上の人馬の迹、太華泉、会昌寺、会曠、大孚靈鷲寺、解脱禅師、僧明禅師、黒峰山、龍猛菩薩、二十四依、インドの石窟寺、龕、一化主の立像、龍樹の鍊金術、紫光を発する金、地の穴より入って寺に至る、経匣を窟内に安置、太一、巨靈大人の秦洪海と巨人伝説、張衡の西京賦、九空仙寺、道宣の実査、仙人の住まいとしての窟、藍田大谷、伏羲城、帰義寺、窟に依って夏坐する、子午関、虎、藍田悟真寺、梁州道、駅、駅家の官食の拒否、櫻欄寺、石室と石門、宝器、瓠盧、天蔵、九十九億大阿羅漢、三千界、四大洲、人寿六万歳、聖人、辟支仏、慈仏などで、それぞれ本文の文脈に即しながらも関係する原文史料や研究にできる限り目配りし、多角的な論点を提示することに努めた。

また、上掲の論点をさらに掘り下げた関連論文6篇を「研究篇」として掲載した。いずれも研究協力者らの執筆になるもので、「天台山石梁イメージの受容 曾我蕭白「石橋図」を中心とした考察」(木内拓郎)、「表象された蓬莱説話」(馬歌陽)、「日本における不邪淫戒に関する考察」(上村駿介)、「相州鼓山竹林寺考」(稲葉秀朗)、「聖寺と天馬」(原媛)、「偶將心地問高士、坐指浮生一夢中—正倉院蔵金銀平紋琴研究」(王姝)である。

これに続く「瑞経録」は、序文以下、曇無竭、釈道安、釈僧生、釈道冏、釈普明、釈慧果、釈惠進、釈弘明、孫敬徳、釈道琳、釈志湛、范陽僧、并東看山、魏闡官、周経上天、隋揚州僧、釈道積、釈宝瓊、釈空蔵、釈遺俗、史呵誓、令狐元軌、釈曇韻、釈僧徹、河東尼、釈曇延、釈道遜、釈智苑、嚴恭、李山龍、李思一、陳公太夫人、岑文本、蘇長妾、董雄、益州空経、高文、崔義起という後漢から初唐時代までの38話でなり、30数人の僧尼や俗人を主人公として、『法華経』『観音経』『涅槃経』『金剛般若経』『薬師経』などの經典の受持・誦経・講経・写経をめぐる靈驗説話を集成したものである。

付注箇所は総計383項目にのぼり、このうち285項目についての詳細な注釈を『美術史料として読む『集神州三宝感通録』 釈読と研究 (十三)』、『同(十四)』に収録した。すなわち、化導、靈府、捨身の偈句、龍殿、土行投経、賊徒盜葉、合蔵騰於天府、石開矢入、水流氷度、志怪、冥祥、旌異、徴応、曇無竭の西域行、天竺舍衛、釈道安、石趙の乱を襄陽に避ける、般若道行、夢に現れた寶頭廬、頭が白く眉毛の長い道人、十誦律、仏寺に祀られる寶頭廬、釈道冏、鍾乳を採る、普賢行道と感応、般舟三昧、胡床に坐す人物、蔬食・布衣、懺誦、諷誦、別衣・別座、象に乗る普賢菩薩の現前、維摩経の読誦と空中の倡楽の声、瓦官寺、十地経、嗽糞鬼、道宣による六道観、同一經典の多数造経、雲門寺、『法華経』の誦経と礼懺、水瓶、諸天童子、山精、観音像、観世音救世経、三段に折れた刀、高王観世音経、身代わりの仏像、浄名経、聖僧斎、銜草寺、省事少言、入鳥不乱、宝誌、須陀洹、聖僧、一指を舒べる、志湛の人頭山中への埋葬、法華経読誦僧の舌、志湛の塔、堤下に殞す、白鹿山、一童子の供給、死後の露屍、黄白色の土、法華経受持と六根不壊、石函に緘す、丈夫相、北魏における華嚴経の信仰、旌異記、周祖滅法、困、大品の第十三、心下暖かし、僧の地獄における処遇の違い、誦経の作法、釈道積、福成寺、澡沐、跏坐、道積の臨終後、方術、米族、天尊、道像、神鼎の感得、玉泉寺、釈空蔵の遺身、起塔の遺言、遺俗の舌の塔、史呵誓、臨終時の香気、夫婦の合葬のしかた、史呵誓の舌の収葬、金剛般若経、如法の作善、老子五千文、金銅の経軸、潢色、西明寺、曇韻禅師、書生、写経に際しての潔浄、檀香、八戒、浄室、経巻の装潢、癩者、病之良薬、練行尼、工書による写経、曇延法師、涅槃経義疏、舍利塔前で焚く、光明を放つ舍利塔、戒師、曇延の弟子、仁寿寺、師子品、高僧の講経と命終、徒跣で柩を運ぶ、屍の周囲に花が生ずる奇瑞、智苑による石経事業、石室の造作、石経事業の支援者、房山の植生、石経事業の継承、如法経、宮亭湖などである。

これを通して特に、清浄性や如法な実践が重視された意味と実態、誦経者の死後の舌根不壊、高僧の遺骸の処置や埋葬法、遺骸にまつわる奇瑞、房山における刻経事業とその歴史的意義などの問題について詳細かつ多角的に掘り下げることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 肥田路美	4. 巻 274
2. 論文標題 初唐道宣の『集神州三宝感通録』と呉越	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学274 呉越国 10世紀東アジアに華開いた文化国家	6. 最初と最後の頁 189～194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 肥田路美	4. 巻 1
2. 論文標題 南齊武帝の瑞石像與吉野寺放光樟像	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 杜曉勤・河野貴美子編『文獻・文學・文化 中日古典學交流與融通工作坊論集・第一卷』北京大学出版社	6. 最初と最後の頁 416～435
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 肥田路美	4. 巻 なし
2. 論文標題 玄奘の仏像請来の事績二件	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『玄奘三蔵 新たなる玄奘像をもとめて』勉誠出版	6. 最初と最後の頁 331～351
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 肥田路美	4. 巻 1
2. 論文標題 彫刻史から問い直す	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本宗教史1 日本宗教史を問い直す』吉川弘文館	6. 最初と最後の頁 229-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 肥田路美	4. 巻 6
2. 論文標題 大型多尊磚仏と法隆寺金堂壁画	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古代文学と隣接諸学 古代寺院の芸術世界	6. 最初と最後の頁 386-413
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 肥田路美	4. 巻 6
2. 論文標題 古代寺院はなぜ「芸術世界」か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古代文学と隣接諸学 古代寺院の芸術世界	6. 最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 肥田路美	4. 巻 なし
2. 論文標題 弥勒仏の信仰と倚坐形如来像 五世紀から則天武后期以前まで	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中央アジア仏教美術の研究 釈迦・弥勒・阿弥陀信仰の美術の生成を中心に	6. 最初と最後の頁 47-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 肥田路美
2. 発表標題 南齊武帝の瑞石像と吉野寺放光瑞像
3. 学会等名 中日古典学工作坊 第二屆學術研討會（國際學會）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 肥田 路美
2. 発表標題 唐代高僧の理想世界 道宣《集神州三宝感通録》分析
3. 学会等名 中央研究院歴史語言研究所主題講座（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 肥田路美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 125
3. 書名 美術史料として読む『集神州三宝感通録』 釈読と研究（十四）	

1. 著者名 肥田路美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 私家版	5. 総ページ数 124
3. 書名 美術史料として読む『集神州三宝感通録』 釈読と研究（十三）	

1. 著者名 肥田路美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 581
3. 書名 古代寺院の芸術世界	

1. 著者名 肥田路美、藤岡穰、于春、八木春生、長岡龍作、稲本泰生、顔娟英、倉本尚徳、沙武田、久野美樹ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 626
3. 書名 アジア仏教美術論集 東アジア 隋・唐	

1. 著者名 松原朗、後藤秋正、妹尾達彦、肥田路美、金子修一、竹村則行、石見清裕、森部豊ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 杜甫と玄宗皇帝の時代	

1. 著者名 肥田路美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 臺灣大学出版中心	5. 総ページ数 489
3. 書名 雲翔瑞像 初唐仏教美術研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------